

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(史的研究)

富岡 宏太

今期も多くの研究が発表された。その中からいくつか述べる。副題は省略する。

はじめに、川瀬卓『副詞から見た日本語文法史』(ひつじ書房)を挙げる。副詞の統語的変遷や文法的意味の分化のほか、配慮表現など、歴史語用論への言及もあり、同氏の研究がいかに多角的になされてきたかがわかる。地域差への考慮が手厚いのも特徴である。地域差に関しては、森勇太「近世後期洒落本に見る丁寧語の運用とその地域差」(『日本語文法』23-1)も重要である。丁寧語使用の地域差を示し、特に江戸語では標準語としての性格を帯びることが影響しているとする。

文体やジャンルの違いを考慮に入れて通時的変遷を追う論もいくつか見られた。代表として2件を挙げる。北崎勇帆「不定語疑問文の主題化」の歴史は、「なぜなら」「なぜかといえば」といった疑問節を埋め込む表現が、元々は和文体に見られず漢文訓読体の表現であったことを示す。そのうえで、当該表現の歴史の変遷を、多様な資料を適切に扱いながら明らかにする。文から文相当句へという流れの中にある言語事象が、また1つ、詳らかにされた点でも大きい。菊地そのみ「〈付帯状況〉を表す節における統語的制約の変化」(『日本語の研究』19-2)は、「おもて赤みて(=顔を赤らめて)」のように、古代語では「主語-自動詞」の構造、現代語では「目的語-他動詞」の構造をとる従属節の例について、韻文と散文とのジャンル差にも注意しながら通時的に調査し、論を進める。さらに、変化の背景として、日本語における「活格性の喪失」という大きな問題につながる可能性を示唆する。菊地自身が「可能性」と述べるように、更なる検証が必要であるが、事実の記述と体系への意識、両方のバランスが重要であることを再確認した。

上記のような、資料の文体やジャンルへの意識は、資料を使いこなせることが前提である。この点で重要なのが山本佐和子『抄物の言語と資料』(くろしお出版)である。同氏のこれまでの研究が一冊に収められているのもうれしいが、「[付録]抄物の利用法」には、通時の研究の中で抄物がやや軽視されている現状や、利用法が丁寧に記述されており、勉強になった。

副助詞に関わる論として、小柳智一「中古の副助詞「さへ」」(『国語と国文学』100-4)と、古田龍啓「中世のマデ」(『日本語の研究』19-2)があった。小柳は、類似の副助詞「だに」と対照して研究がされがちな「さへ」について、あえて、単体で見えていくことの必要性を示す。古田は、「まで」が「それなら諦めるまでだ」のように、文末用法を獲得する流れを、統語面や用法間の連続性から丁寧に論じる。

現代語との対照研究では、古川大悟「ベシの多義性の原理について」(『花園大学日本文学論究』15)が、現代語「はずだ」の枠組みを上代語「べし」に適応し、基本的意味を考える。「他言語」の枠組みを用いることで見えるものと見えなくなるものへの考慮が、これからの研究に求められると感じた。(群馬県立女子大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(現代)

志波 彩子

日本語学と日本語教育の乖離が著しくなった昨今の現状に対し、近年、日本語教育のための教育文法が叫ばれつつあり、『日本語文法』23-1では「日本語教育」の特集が組まれた。コーパスを用いた日本語教育文法の研究も盛んだが(中俣尚己(編)『話題別コーパスが拓く日本語教育と日本語学』ひつじ書房など)、数値を出すこと自体が目的になってしまっている研究が散見される。数値はあくまで「事実」であり、これが何を意味するかという「説明」のための材料・手段であるべきだと思う。

一方、現代語の文法記述の流行は、文の骨格としての文法現象から外れるために、従来記述が進んでいなかった副用語や副詞的表現の研究に移りつつある。2023年も多くの副詞研究に加え、とりたて(副助詞、係助詞)、接続表現等の研究が見られた(『日本語の研究』『日本語文法』『日本語/日本語教育研究』参照)。その中で、井戸美里『現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究』(くろしお出版)は、とりたて詞が持つ多義をめぐって、それぞれの意味の現れと文法的な性質(統語的特性)との関係性、また意味間の関係性を丁寧に論じたものとして目を引く。井戸がとりあげている文法形式や語彙が持つ「評価性」は、今後も文法研究において議論の中心となる課題だろう。

宮腰幸一「アスペクト依存ヴォイス関数と経験主指向性」『日本語文法』23-1は、テシマウが表す「動作の完遂」や「不本意」、「反予測(非意図)」、「思い切って行う」などの、一見矛盾する意味記述をめぐって、「意図」を「行為者が行為開始前に(無意識に)生み出す結果の予測」と定義して、統一的な説明を試みる。この中で宮腰は、日本語文法は経験主指向性が強いとし、テシマウ、使役や受動、授受表現などはすべてこの経験主指向性と関わっていると述べる。これは、筆者(志波)の見方からすれば、日本語が話し手の側から事態を述べることを好む言語に変化してきたことによる結果であり、「動作主指向」の西欧語に対し、日本語は「話し手指向」だとする方が本質的だと思われるが、今後の議論の展開に注目していきたい。

ジャンル・文体と文法との関係として、拙稿「ジャンル・テキストとその要素としての構文—受身構文を例に」『日本語文法』23-2では、ある意味的なまとまりとしてのテキスト全体を、その部分(要素)として構文が構成しているという見方から、テキストと構文とのダイナミックな相互作用について論じた。テキスト(談話)における構文の機能については、ニームチャラン・ニーラチャー「存在文における名詞句の指示性と主題導入機能」『日本語文法』23-1、認知言語学からは、山梨正明『小説の描写と技巧—言葉への認知的アプローチ』(ひつじ書房)があった。

最後になるが、近年の動向に引き続き対照研究も深まりを見せ、陳冬妹『話し言葉における受身表現の日中対照研究』(ひつじ書房)では、中国語の被構文と日本語の受身構文について、詳細な対照がなされている。(名古屋大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(古典)

森田 直美

近年の古典文学研究界が総体として力を注いでいるテーマのひとつに、古典文学教育が挙げられる。先細り必至の古典文学界を見据えて待ったなしの課題と言え、これに携わる一人ひとりが意識と関心を保ちながら連携し、学び合った知見を各現場で表現・体現する必要がある。国語教育と重なる点もあるかもしれないが、これを視座として2023年に刊行された学術論文・著書を紹介したい。

この課題下において、吉野朋美・小林ふみ子「コロナ禍における高・大・院・社会人連携古典文学ワークショップの試み—日本文学アクティブラーニング研究会主催第6回オンラインワークショップ「妖怪総選挙」実践報告—」(『中央大学文学部紀要』第294号、2023年2月)は極めて啓発的である。コロナ禍を受け、zoomを用いて「妖怪」をテーマに行われた事前学習・WS・フィードバック等の実践報告から、さまざまなヒントやアイデアを得ることができる。WSや授業を実施する上でのオンライン活用方法という視点でも、大いに参考となる。

また、シンポジウム報告「古典文学の伝え方—「現代語訳」の方法を考える—」(『文学・語学』第239号、2023年12月)からは、古典文学教育に不可欠である現代語訳を多様な観点から考え直す機会を得た。中でも特に、逐語訳に関する検討を軸とする、富岡宏太「ことばをくらべて考えるための「現代語訳」」には、思考の転換を促された。逐語訳には、現代語としては不自然な表現が生じやすいという欠点があるため、意訳や注釈的な訳を交えて調整される場合が多い。しかし同論では、その不自然さを通してこそ発見できる古代語と現代語の性質の違いを明示し、教育現場における逐語訳の有益性を説いている。同シンポジウム報告から他に、福家俊幸「『更級日記』の現代語訳—江國香織訳を中心に—」も紹介したい。ここではまず、江國香織訳(池澤夏樹=個人編集 日本文学全集03『竹取物語/伊勢物語/堤中納言物語/土左日記/更級日記』、河出書房新社、2016年)と島内景二訳(『新訳 更級日記』、花鳥社、2020年)の特徴を比較し、原文に補足的情報を極力足さない前者と、背後・周辺情報を豊富に盛り込む後者の差異を示している。その上で、教科書的な口語訳とともに、多種多様な現代語訳や翻訳、さらに翻案小説なども併用したアクティブラーニングの可能性にまで言及が及ぶ。

最後に、和歌の教授法という点から、川村裕子編『拾遺和歌集』(ビギナーズ・クラシックス日本の古典、角川ソフィア文庫)を挙げたい。和歌の入門書としてはもとより、解説の口跡から周辺知識の提示加減に至るまで、実践的な教育法の指南書としても同書から得られる学びは大きい。文法や語彙の習得に加え、和歌は前提とすべき約束事が多く敬遠されがちである。その和歌と初学者の間をどう取りもてばよいのか試行錯誤する教育者にとって、ロールモデルとなりうる一冊と言えるだろう。

(明治大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(近代)

原 卓史

文学の研究で表現を扱わないものはないだろうが、2023年に発表され、眼を通すことのできた書籍・論文をいくつか紹介したい。

書籍でまず取り上げるべきは、2月に名古屋大学出版会から刊行された坪井秀人『戦後表現—Japanese Literature after 1945—』である。「〈戦後表現〉という表題を掲げる本書が意識しているのも、まさに個体それぞれに固有の経験を個人が語ることがこの通有性や普遍性を帯びて他者との〈学び〉に向けて開かれ共有されていくことにある」といい、有名・無名を問わず様々な表現を取り上げていく。600頁に及ぶ考察は圧巻。2月に和泉書院から刊行された青木(秋枝)美保・前田貞昭編著『井伏鱒二未公開書簡集—ある級友への手紙—』は、高田類三宛書簡を中心に、171点もの未公開書簡を公開。第一部では、翻字とともに詳細な注が付く。第二部は、本書収録書簡をもとにした研究成果である。秋枝は、収録された高田類三への書簡を中心に、文学揺籃期の井伏が短歌を詠むことを通して表現の模索を行っていたことを明らかにした。前田は、高田宛書簡に井伏が小説とは異なる自己像を描いていたことを考察した。実証研究のお手本となる書である。3月に岩波書店から刊行された十重田裕一『川端康成—孤独を駆ける—』は、川端康成の軌跡をメディアとの関わりで論じたものである。「雪国」は「闇と光の表現」が多く「新しい表現を生み出そう」としたとし、「古都」は「海外からの視線を織り込みながら、日本のイメージを表現」したことなどを指摘。1月に花鳥社から刊行された鈴木彩『泉鏡花の演劇—小説と戯曲が交差するところ—』は、「アダプテーション」の理論を援用して、「原作には権威があるという前提を持たないという立場」に基づき、泉鏡花の小説と戯曲がどのように表現されたのかを析出。

雑誌論文では、古矢篤史「婦人雑誌における「銃後」言説形成と連載小説—日中戦争開戦期の『主婦之友』と横光利一「春園」—」(『関西近代文学』 3月)は、『主婦之友』のジェンダー規範を装いながら「戦時下に創出されたジェンダー規範」とは別の女性像を描き出した「価値規範が衝突しあうテキスト」として、横光利一「春園」を評価した。ウェブ配信のみで刊行された雑誌『関西近代文学』の今後の発展にも期待したい。大西洋平「感じる」ことの再編—坂口安吾「FARCEに就て」論—(『坂口安吾研究』 3月)は、「FARCEに就て」の「純粋な言葉」を巡って考察し、同時代のプロレタリア文学や新感覚派と対置させて、「語りえない「感銘」を「言葉」にしようという「意志」によって、創作主体の感性を構築しようとした点にその独自性を見ることができるとした。戸塚学「「物語」の反響—中里恒子「野薔薇」—」(『芸術至上主義芸芸』 11月)は、中里「野薔薇」は堀辰雄「物語の女」に影響を受けた作品ととらえ、堀の作品が「人物同士」の「感情の輪郭を曖昧」にとどめたのに対して、中里の作品はそれらを「別様」に書いて見せたという。最後に、多くの遺漏を許されたい。

(尾道市立大学)

【表現学関連分野の研究動向】

国語教育

佐藤 多佳子

2023年の国語教育研究の動向として、多くの大学で教育学研究科修士課程から教職大学院への移行が急速に進んだという背景から、教育実践を照射した研究が増えていることが挙げられる。全国大学国語教育学会編『国語科教育』第九十三集では、秋季大会(第143回千葉大会)のシンポジウム「新しい実践学としての国語教育学を探る—教職大学院における国語教育研究のあり方—」、『国語科教育』第九十四集では、春期大会(第144回島根大会)のシンポジウム「授業場面における国語科教科内容の生成」の報告がなされている。実践学としての国語教育学・国語教育研究への探究があると同時に、コンピテンシー・ベースの時代における国語科教科内容論や国語教育研究の枠組みの捉え直しの議論がなされている。『国語科教育』第九十三集では、久田義純「中学校国語科授業における「語り」概念習得のための指導方法の開発—日記創作の活用と「ごんぎつね」の語りに着目した実践から—」が実践論文として掲載され、文学教育においてナラトロジーを視点とした実践や研究に関心が寄せられていることがわかる。『国語科教育』第九十四集では、木村季美子・上田楓・明尾香澄「アーノルド・ローベル「おてがみ」の「名づけ得ない関係性」を読む—教材可能性を開くクィアの思弁的なプロセス—」が研究論文として掲載され、クィアを視座として固定的な枠組みを前提とした教室の読みの営みにおいて見逃されていた教材可能性を提示している。

日本国語教育学会編『月刊国語教育研究』では、2023年4月No.612で「「学びたい」に応える国語単元学習」という特集が編まれた。特集論文の小林一貴「プレ・ジャンルから「教えること」を考える」では、プレ・ジャンルの概念をふまえ、ワークショップ形式の書くことの授業における対話的な活動の「複相状態」に着目し、教える側の「相互行為のプロセスの参加者としての振る舞い」の重要性に言及している。同号の研究論文、西一夫「川辺の景と情—『伊勢物語』「東下り」教材化への視点」において、「東下り」の八橋の場面に描かれる景物や表現の工夫などを教材として扱う視点から分析を試みている。また、同誌2023年12月No.620では、生成AIへの注目やGIGAスクール構想による一人一台の情報端末の使用に鑑みて「国語単元学習と情報端末の活用」を特集している。特集論文として、大井和彦「生活における情報端末環境から考える国語科学習—話すこと・書くことと情報のとらえ方から—」では、「情報端末は処理の道具ではなく、思考と表現を促す学びの道具」であるとして「個別最適」なものを選ぶ大切さを指摘している。同特集論文、羽田潤「マルチモーダル・リテラシー育成を目指した国語科単元学習」では、タブレットの導入によって動画の教材化の可能性が広がったことを受け、マルチモーダル・リテラシー(複数のモードによって構成される生成物を対象とした、読解力や表現力、活用する力)の育成を目標とした学習の効果に言及している。

(上越教育大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本語教育

梶原 彩子

『日本語教育』184号では「ともに学び未来を描くキャリア形成の現場」という特集が組まれている。自治体・小中学校・高校・大学等多様な現場の学習者のキャリア形成の取り組みに関する論文に加え、海外の日本語教育人材に関する論文(古川嘉子「東南アジア5か国比較と調査に見るフィリピン人日本語教師のキャリアと成長」)も掲載されている。古川論文では、質問紙とインタビューによる調査を行い、フィリピン人日本語教師のキャリア形成を制度面と教師個々の認識から記述し、日本語教師の「専門性の三位一体モデル」に基づく振り返り、公的機関による継続的な教師養成・研修の実現の重要性を指摘している。

国内の日本語教育人材の養成に目を向けると、2024年から登録実践研修機関・登録日本語教員養成機関の登録が開始されるという大きな動きがある。養成機関は登録申請に向けて準備を進めるなかで、新制度の枠組みに沿った教育実習の実施に向けた対応も進めている。このような状況の下で、文化審議会国語分科会(2019)「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改訂版」(以下、「報告」)で分類、定義された段階的区分(養成・初任・中堅)の専門性を持つ日本語教育人材に求められる資質・能力、養成・研修に関しても、活発に議論されている。

そこで、養成段階の大学における日本語教育実習の実践研究に注目したい。大河内瞳・樋口尊子「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした日本語教育実習と実習を通じた大学生の学び」(『日本語教育』185号)では、日本語指導が必要な児童生徒を対象に教育実習を行い、見学記録とレポートに記述された大学生の学びや気づきが「報告」の養成・初任に求められる資質・能力と重なっていたという。『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』第20号は、日本人大学生・留学生の意識変容の調査から、「報告」の技能面や態度面の資質・能力を涵養させるという点で教育実習の意義を示した調査・実践報告(山下順子・道法愛・永田良太「日本語教育実習を通じた「日本語教師に求められる資質・能力」の変容—日本人学生と留学生の自由記述データの比較—)、教育実習を行った大学生の気づきの分析から「報告」の資質・能力の有効性と限界を示した論文(千々岩宏晃・松岡里奈「大学の日本語教育実習で学ばれる資質・能力は、準拠枠としての「資質・能力」リストとどの程度一致し、何が含まれないのか」)を掲載している。養成機関がどのような理念の下で、日本語教育人材に必要な資質・能力をどのように身に着けさせていくのかが問われるなか、これらの研究は、大学で日本語教員養成に携わる教員に大きな示唆を与えてくれるものである。

2024年度以降は、養成段階の日本語教育人材に求められる資質・能力、その養成方法に関して、新制度下の教育実習からの検討・検証が行われていくことになるだろう。今後も実践と研究の往還が活発に行われることが期待されている。

(国士舘大学)

【表現学関連分野の研究動向】

英語学

長谷部 陽一郎

2023年に発表された研究を紹介することもさることながら、英語学を含む表現学関連分野に関わる者が向き合うべき事実について触れなくてはならない。それは大規模言語モデル(LLM)を用いた高性能な人工知能(AI)システム、すなわちChatGPTやそれに類するツールの出現である。初期のChatGPTで用いられた言語モデルの構築には約5,000億トークンのデータが用いられた。これは書籍でいうと約500万冊に相当する(東京大学松尾研究室「LLM大規模言語モデル講座資料」より)。こうしたLLMが発揮する能力には目を見張るものがあり、ChatGPTはユーザーの指示に応じて様々な文章を生成することができる。訓練データの大部分は英語によるものであることから、英語においては形式・内容ともに正確で自然な文章を作り出すことができる。また最新のGPT-4では日本語を含む多数の言語における性能も大幅に向上した。

2023年には学術や教育はもちろん、商業や行政においても、ChatGPTをいかに活用するかという話題が取り上げられ、多くの議論と新たな試みを生んだ。これが意味するのは、他でもない、「AIによって生成された『表現』が日常の至るところに入り込んだ社会の誕生」である。すでに企業の広告に、学校の教材に、小説やコミックに、AIによる文章が(また画像、音声、映像が)用いられ始めている。私たち人間と異なり、AIには現実世界と「接地」する身体がなく、それらは意思と意図をもった「主体」ではない。しかし、AIに生成された記号列が「表現」であるかどうか、そうであるならどのような「表現」なのか、これらを考えることは表現学ならびに隣接分野において重要な課題となると思われる。

2023年を通じて、急速なAIツールの発展・普及と同時並行的に、英語学・言語学の関連分野の研究者からはいくつかの興味深い研究や論考が示された。町田章は『AI時代に言語学の存在の意義はあるのか?』(ひつじ書房, 2023)において、LLMの基礎技術であるトランスフォーマーに、認知言語学(認知文法)におけるアテンションの概念と共通した何かがある可能性を示唆している。一方、生成文法の立場に立つノバート・ホーンステインは、「GPTの振る舞いを少し見るだけで(中略)正しい認知モデルにはならないだろうとわかる」と否定的に述べる(岩波書店『科学』12月号, 2023)。これらとは別の観点から、Tiago Torrentらは著書*Copilots for Linguists: AI, Constructions, and Frames*(Cambridge University Press, 2023)で、人間の言語能力を模倣するAIを使ってインタラクティブな対話データを得ることにより、構文文法やフレーム意味論の研究を効果的に進めていける可能性があるとして論じている。また、今井むつみ・秋田喜美著『言語の本質—ことばはどう生まれ、進化したか』(中央公論新社, 2023)ではChatGPTの高い性能に触れつつ、人間ならではの能力として、ブートストラッピング・サイクル(段階的な学習方法の洗練)とアブダクション推論(仮説形成推論)について論じている。

このように、2022年11月に公開されたChatGPTは英語学・言語学の領域でも多くの議論を呼び起こした。この波はしばらく止むことはないだろう。(同志社大学)

【表現学関連分野の研究動向】

認知言語学

南 佑亮

近年、認知言語学の研究パラダイム内において、理論・方法論の見直しと新たな可能性を探求する動きが盛んであるが、2023年もその傾向を象徴する著作・文献が国内外で多数出版された。以下では、その一部を取り上げる。

まずは、『認知意味論を目指してI/II』(岩田彩志・菊田千春・西山淳子監訳、開拓社)と『フレーム意味論とフレームネット』(藤井聖子・内田諭、研究社)の二点を挙げるべきであろう。前者は認知言語学の創始者の一人Leonard Talmyによる1970年代から約30年の研究の集大成 *Toward Cognitive Semantics*(全2巻)のvol. 1の全面翻訳(二分冊)である。後者はフレーム意味論とフレームネットについて、辞書作成・語学教育・自然言語処理への応用に関する解説も含めた概説書である。認知言語学において重要な位置を占める二つの意味論の全体像について日本語で読める書籍が世に出たことの意義はきわめて大きい。

次に、学際的視点から新たな研究領域の開拓を試みたものとして『小説の描写と技巧—言葉への認知的アプローチ』(山梨正明、ひつじ書房)と『プラグマティズム言語学序説—意味の構築とその発生』(山中司・神原一帆、ひつじ書房)の二冊を挙げておきたい。前者は、散文芸術である文学テキストにおける描写の技巧が様々な認知プロセスに動機付けられたものであることを豊富な実例と共に示しながら、認知言語学と文学研究との有機的接点を探るといふ、意欲的な著作である。後者は、従来の言語研究には欠けていたプラグマティズムという思考の枠組みを導入し、意味のマルチモーダル性(身体性)、フレーム理論、記号論、ネオサイバネティクス、第二言語習得という新旧の様々な研究分野の知見を統合することの意義を論じた、挑戦的な一冊である。

AI技術と言語学の関係についての著作が国内外で出版されたことも特筆に値する。『AI時代に言語学の存在の意味はあるのか?—認知文法の思考法』(町田章、ひつじ書房)は、「理論言語学者や語学教師は近年急速な進歩を遂げているChatGPTなどの生成AI技術といかに向き合うべきか」という問いと真剣に格闘した、啓発と提言の書である。一方、*Copilots for Linguists* (Tiago Timponi Torrent, Thomas Hoffmann, Arthur Lorenzi Almeida, and Mark Turner, Cambridge University Press) は、将来的に言語学者が機械学習に基づく生成AIツールを助手(assistant)として利用しながら構文文法的な言語分析を進めていく可能性を詳細に検討したものであり、同書自体が町田氏の投げかける問いへの一つの解答となっている点で興味深い。

構文文法(Construction Grammar)関連では、オンラインジャーナル *Constructions* の特集号“35 Years of Constructions” および *Cambridge Elements in Construction Grammar* シリーズの一連の著作(上述の *Copilots for Linguists* を含む)が立て続けに発刊された。いずれにおいても中堅・若手研究者による論考が際立っている。今後のさらなる進展に注目したい。

(神戸大学)

【表現学関連分野の研究動向】

修辞学

加藤 祥

修辞学を扱った研究は、2023年にも多岐にわたる分野で多くの成果が発表された。特に比喩研究において、直喩論の検討とともに用例の分析例を集めた論文集①半沢幹一編『直喩とは何か：理論検証と実例分析』（ひつじ書房）、直喩を中心とした用例集②中村明『もの・こと・ことばのイメージから引ける比喩の辞典』（東京堂出版）があった。近年は、比喩の用例分析を目指した大規模な用例収集が進んでいる。比喩表現の収集例として③菊地礼「中世期日本語比喩表現の収集の試み」（『言語資源ワークショップ発表論文集』1）、既存用例集の電子化と情報付与例として④加藤祥・浅原正幸『『比喩表現の理論と分類』データの電子化および情報付与』（『国立国語研究所論集』25）、収集の検討例には⑤宮脇星名・安藤一秋「小説テキストからの動詞を用いた直喩表現を含む文の抽出手法の検討」（『情報処理学会第85回全国大会講演論文集 2023（1）』）などの成果が見られた。

種々の修辞技法や表現を取り上げた研究も進む。⑥胡佳芮「流行歌の歌詞における二重表記の用法：主表記と副表記との意味的關係に着目して」（『一橋大学国際教育交流センター紀要』5）、⑦藤原隆史「NPN構文に関するコーパス分析：“arm in arm”に焦点を当てて」（『教育総合研究』7）、⑧近藤芙由「指示詞使用における指示対象の後置現象：実用的後置と修辭的後置を中心に」（『さいたま言語研究』7）、⑨伊藤薫「構成の反復」の並行性についての構文文法的記述の試み」（『Evidence-based Linguistics Workshop 発表論文集』2）、⑩ Debuchi, Eri「The Language of Pain: Eye Ache in Japanese and English」（『神奈川大学言語研究』45）など、意味・文法の観点から精緻な分析があった。主にオノマトペ研究では、⑪山崎英明「子どもの歌におけるオノマトペ抽出の研究～擬情語に焦点をあてて～」（『リカレント研究論集』3）、⑫黄慧「お菓子メーカーの商品パッケージに使われるオノマトペーお菓子メーカー4社を対象に一」（『語学研究所論集』27）など、分析対象に新分野を扱う傾向が見られた。和歌を対象とした分析、詩を対象とした論考集⑬野沢啓『ことばという戦慄：言語隠喩論の詩的フィールドワーク』（未来社）、⑭富山英俊『比喩と反語 アメリカの詩と批評』（せりか書房）などもあった。

また、修辞を教育や学習指導に援用するための⑮鷲見幸美「小学校低学年教科書に見られる比喩」（『名古屋大学人文科学研究論集』6）、⑯長澤元子「生徒の興味関心に基づいた詩を用いた修辞法の習得について」（『国語探究』3）、⑰廉沢奇「学習者コーパス調査をふまえた日本語学習者の ABAB 型基本オノマトペの使用実態の解明」（『統計数理研究所共同研究リポート』465）などの応用的な研究が進んでいる。

大規模な用例収集と実証的な用例分析に基づき、従来の理論や手法の再検討が進むとともに、多様な修辞技法の研究が深化している。そして、新分野における検証、新たな理論の構築、研究成果の利活用が図られる傾向が見られる。（目白大学）

【表現学関連分野の研究動向】

文章・談話研究

宮澤 太聡

文章・談話研究として、2023年に刊行された書籍から研究動向を確認する。2022年の終わりに公開されたテキスト生成AIのChatGPTは、すでに大学のレポート課題作成や小説執筆に活用される(できてしまう)レベルとなっており、人間が表現すること、理解することの意義が改めて問われている状況にあるといつてよい。ここでは、表現研究の観点から重要だと思われる3冊を取り上げる。

①文章作成に関する研究：『日本語学』冬号(明治書院)の特集「文章を書く教育」に代表されるように、文字によるコミュニケーションの中でも「表現」についての関心が高まっている。石黒圭『ていねいな文章大全』(ダイヤモンド社)は、「ていねいな文章」の四条件を挙げ、媒体や目的によって「ていねい」の基準が変化することを様々な事例を取り上げながら論じる実践的な表現の教科書といえる。特に、テキスト生成AIに対する筆者の立場が明確に示されており、人間が人間に向けて書くことの意義を考える上でも示唆に富む。

②文学作品の文章研究：山本貴光『文学のエコロジー』(講談社)は、「文芸作品のエコロジー(生態系)をコンピュータでシミュレーションモデルとしてつくってみる」(p.029)という立場で、様々な文芸作品を用いてエコロジーの分析観点を提示し、文学作品とシミュレーションの比較から、作品内世界の膨大な要素が「省略」されていると論じている。ただ、「文学作品は言語によって組み立てられており、そこには作品内世界の一部が表現されている。」(p.377)とあるように、シミュレーションモデルによってエコロジーを観察するという方法では、膨大な「書かれなかったこと」よりも、掬い上げられた「書かれたこと」の価値が相対的に高まると思われる。さらに、「テキスト生成AIは、機械学習の材料とした文章において、文字が並ぶ確率を処理しているだけであり、現実の世界や小説に描かれた世界について、そこにあるエコロジーを扱っていない。」(p.404)という議論は、人間が文学作品を理解するという事を考える上で重要な指摘だと思われる。

③方言学の談話研究：方言学の世界に語用論を取り込むことを目指しこれまでの研究成果をまとめた小林隆『語用論的方言学の方法』(ひつじ書房)は、「語用論的な考察は、必然的に人間の思考の問題に踏み込むこととな」(p.v)るとし、日本語の方言学において手薄であった運用面の研究の必要性を訴えている。文章・談話研究に最も関連するのは、第10章から第12章で、依頼・受諾の談話を対象に、「言語発想法」の地域差によって、談話レベルでの表現が異なると論じており、興味深い。

本稿は、稿者の関心をもとに成果を取り上げたため、扱えなかったものも多い。今回取り上げた3冊は、それぞれ研究分野は異なるが、「人間」を積極的に組み込んだ学問分野の開拓・研究方法の検討という点で共通しており、今後の展開が期待される。

(中京大学)

【表現学関連分野の研究動向】

方言研究

小林 隆

今回から、研究動向の紹介として、本誌に「方言研究」のコーナーが設けられることになった。これまで、方言研究の世界では表現学的な研究が試みられてきたが、方言を対象とした研究はどうしても構造的な視点が強く、表現学的な視点からの研究は十分ではなかった。しかし、近年、方言研究の世界でも、いろいろな意味で「表現」に関わる研究が増えてきた。言語行動や談話、そして、オノマトペや感動詞といった運用の自由度が高い分野を扱う中で、「どう表現するか」ということに関心が集まってきたことが背景にある。日本語には数々の方言が存在する。「どう表現するか」も地域によってさまざまであることだろう。表現学は方言の世界に分け入ることで、研究のための新たな沃野を手に入れることができるはずである。

そのような意味で、表現学的な方言研究は今後に期待される部分が多いが、今期はそうした期待に応える重要な本が出た。半沢幹一『方言のレトリック』(ひつじ書房)である。第I部「方言比喩語」では、全国的な比喩語の様相が概観されると同時に、北東北方言に絞った論述もなされる。単に記述に終わることがなく、方言語彙としての比喩語の位置づけや、位相差、成立要因にも考察が及ぶ。第II部「方言オノマトペ」でも、音声言語を基盤とした方言オノマトペの言語的な特性を検討し、方言学におけるオノマトペ研究の意義を問い直している点が注目される。

方言のオノマトペ研究という点では、川崎めぐみ「東北方言におけるオノマトペの対人評価的な使用について」(『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』34-2)も注目される。オノマトペというと、どうしても構造的な見方が優先されがちだが、この論はその評価性を含んだ使われ方に関心を寄せたもので、まさに表現学的な研究と言えるものである。東北方言では、直接相手に評価を伝える際に、オノマトペ要素「-ラ」が利用されたり、ABCB型系統の語形が使用されたりするといった知見は興味深い。

言語行動の分野では、加順咲帆「「受け止め表明」における言語行動の志向とその地域差—話者の言語感覚による東西の比較—」(『東北文化研究室紀要』64)が目にとまった。「受け止め表明」というのは、いわゆる「応答表現」の範疇を少し拡大した概念だが、その運用において、大阪話者は積極的であり、気仙沼話者は消極的であると言う。片方の地域の会話をもう一方の地域の話者に聞かせて反応を探るなど、方法論の開拓に意を注ぐ点でもユニークな論考になっている。

表現の歴史という観点から見たときにおもしろかったのが、澤村美幸『方言と日本のこころ』(NHK出版)である。方言意識の歴史をたどりながら、現代において方言が対人的な機能を強めたり、社会的な注目を集める役割を担ったりしていることを述べており、今後、この分野の研究に表現学的な視点が欠かせないことを示唆している。

最後に、「表現学」の多様さと私の見落としのために、重要な研究に触れずにしまっていることを恐れる。関係のみなさまのご寛容を願うばかりである。(東北大学名誉教授)